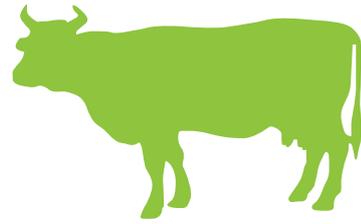


牛肉



◆ 飼養動向

5年2月現在の肉用牛の飼養頭数、前年比2.8%増

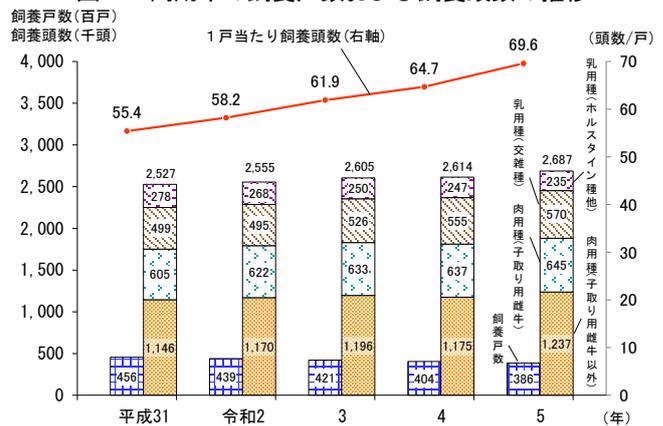
肉用牛の飼養戸数は、生産者の高齢化などによる離農の進行により、小規模層を中心に減少傾向が続いており、令和5年（2月1日現在、以下同じ）は、3万8600戸（前年比4.5%減）と前年からやや減少した（図1）。

総飼養頭数は、増加傾向で推移しており、5年は、268万7000頭（同2.8%増）と前年からわずかに増加した。肉用種と乳用種をそれぞれ見ると、肉用種は、乳用牛への和牛受精卵移植技術の活用や子取り用雌牛（繁殖雌牛）の増頭などにより、5年は、188万2000頭（同3.9%増）と前年からやや増加した。乳用種^{（注）}のうち交雑種は、酪農家における乳用牛への黒毛和種交配率が上昇したことなどにより、5年は、56万9600頭（同2.6%増）と前年からわずかに増加した。乳用種のうちホルスタイン種他は、酪農での性別別精液の普及や黒毛和種交配率の上昇から、5年は、23万4800頭（同4.9%減）と前年からやや減少した。

この結果、1戸当たりの飼養頭数は、69.6頭（同7.6%増）と前年からかなりの程度増加し、経営規模の拡大が進展していることがうかがえる。

（注）肉用牛の「乳用種」とは、「畜産統計」では、ホルスタイン種、ジャージー種などの乳用種のうち、肉用を目的に飼養している牛で、F1などの交雑種を含むと定義されている。

図1 肉用牛の飼養戸数および飼養頭数の推移



資料：農林水産省「畜産統計」
注：各年2月1日現在。

◆ 生産

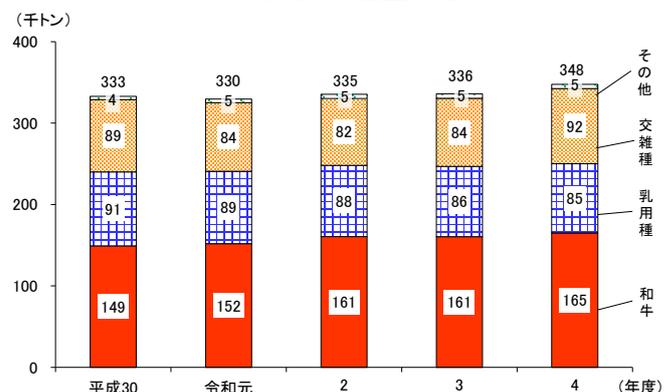
4年度の生産量、前年度比3.5%増

牛肉生産量は、生産基盤強化対策の実施により繁殖基盤が拡大したことなどにより、平成29年度以降、和牛を中心におおむね増加傾向で推移している。

令和4年度は、和牛は16万4984トン（前年度比2.8%増）とわずかに、交雑種は9万2221トン（同10.3%増）とかなりの程度、いずれも前年度を上回った一方、乳用種は8万5156トン（同1.4%減）とわずかに下回った（図2）。

この結果、全体では34万7600トン（同3.5%増）と前年度からやや増加した。

図2 牛肉の生産量の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

◆ 輸入

4年度の輸入量、前年度比1.2%減

牛肉輸入量は、近年、焼き肉やハンバーガーなどの外食産業を中心に牛肉の需要が拡大していたことから、おおむね増加傾向で推移しており、平成28年度から令和元年度までは4年連続で増加した。

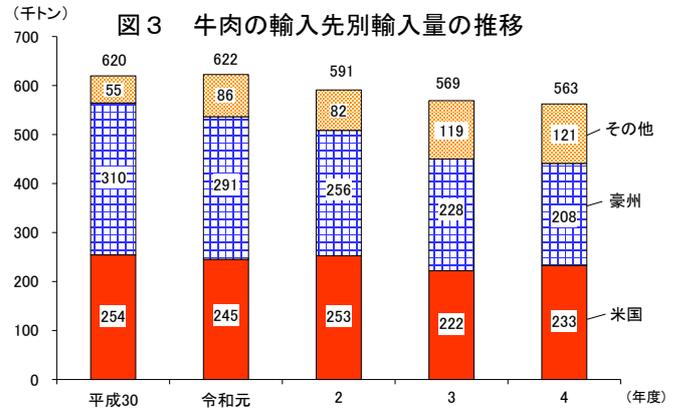
しかしながら、2年度は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響による海上輸送の遅れや、緊急事態宣言に基づく外出自粛要請による外食需要の減少などから減少に転じ、3年度も、COVID-19の影響のほか、干ばつ後の牛群再構築により豪州産の生産量が減少したことや、米国産の現地相場が上昇したことなどから減少した。

4年度は、現地相場の高止まりなどにより冷蔵品の輸入量が減少した一方で、冷凍品については前年同期の輸入量が減少していた反動などにより増加したものの、全体では56万2505トン（前年度比1.2%減）と前年度をわずかに下回った（図3）。

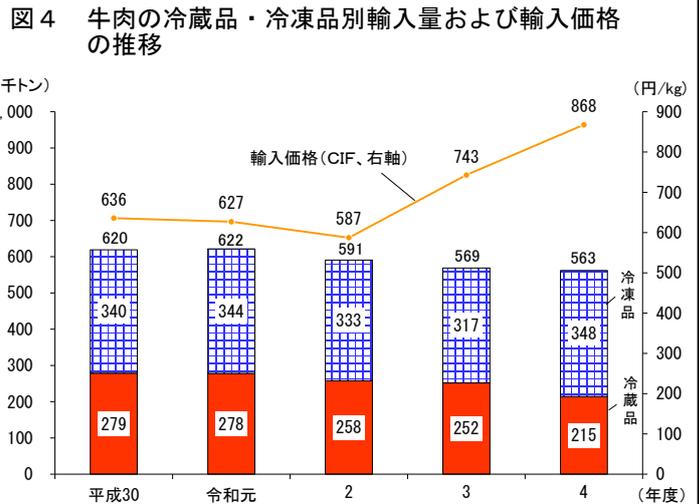
国別輸入量を見ると、豪州産は、20万8016トン（同8.8%減）と前年度をかなりの程度下回った一方、米国産は、23万2994トン（同5.0%増）と前年度をやや上回った。

輸入牛肉のうち、冷蔵品は主にテーブルミートとして量販店などで販売されており、冷凍品は加工用や業務用として利用されていることが多い。近年、いずれも増加基調で推移していたが、COVID-19の影響などにより、その傾向に変化が見られている。4年度は、冷蔵品は21万4535トン（同14.8%減）と前年度をかなり大きく下回った一方、冷凍品は34万7635トン（同9.7%増）と前年度をかなりの程度上回った（図4）。

輸入価格（CIF）を見ると、1キログラム当たり868円（同16.8%高）と前年度を大幅に上回った。



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。くず肉などを含む。



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。くず肉などを含む。

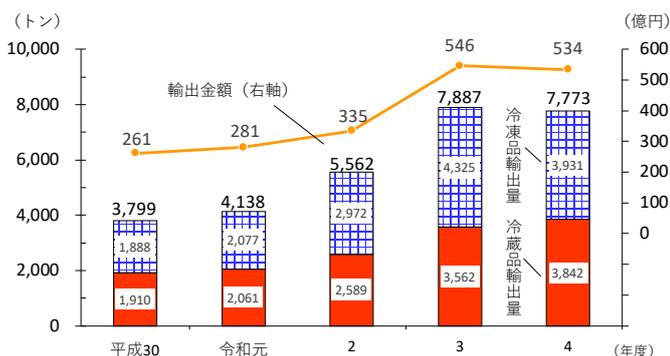
◆ 輸出

4年度の輸出量、前年度比1.4%減

牛肉輸出量は、近年、販路の開拓や販売促進の効果などにより増加傾向で推移していたものの、令和4年度は、台湾などが伸びた一方で、米国における物価高および低関税枠超過後の関税引上げによる消費減退の影響などにより、7773トン（前年度比1.4%減）、輸出金額は534億円（同2.2%減）と、いずれも前年度からわずかに減少した（図5）。

輸出量の内訳を見ると、冷蔵品は3842トン（同7.9%増）と前年度からかなりの程度増加した一方、冷凍品は3931トン（同9.1%減）と前年度からかなりの程度減少した。冷蔵品と冷凍品の割合は、2年度に続き3年度も冷凍品の割合が冷蔵品を1割程度上回る状況が続いたが、4年度はほぼ同程度となった。

図5 牛肉の輸出量および輸出金額の推移

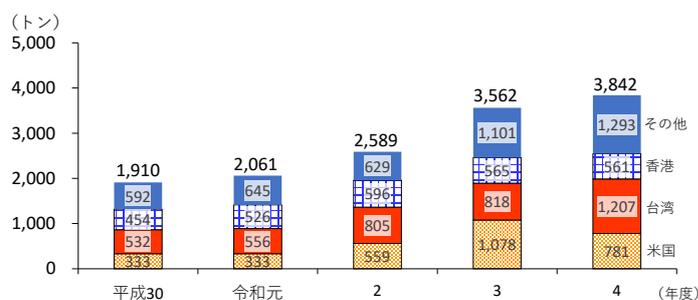


資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

日本からの牛肉の輸出が可能な国・地域は、アジアを中心に中東、欧州、北米・中南米、大洋州のさまざまな国や地域に広がっている。輸出先については、牛肉全体で見ると多くがアジアに輸出されているが、冷蔵品と冷凍品で輸出先は異なっている。

冷蔵品の輸出先を見ると、4年度の最大の輸出先は台湾で1207トン（シェア31.4%）、次いで米国が781トン（同20.3%）、香港が561トン（同14.6%）となり、上位3カ国・地域で約7割を占めている（図6）。

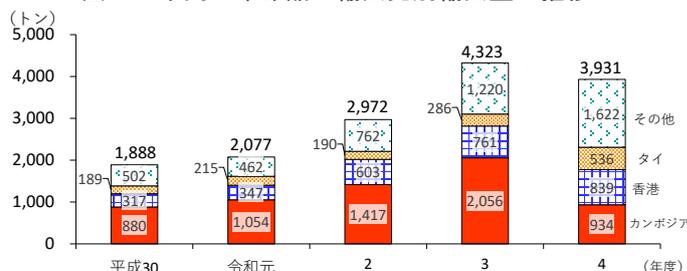
図6 牛肉の冷蔵品の輸出先別輸出量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

冷凍品の輸出先を見ると、4年度の最大の輸出先は前年度に続きカンボジアで934トン（シェア23.8%）、次いで香港が839トン（同21.3%）、タイが536トン（同13.6%）となり、上位3カ国・地域で約6割を占めている（図7）。

図7 牛肉の冷凍品の輸出先別輸出量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

◆消費

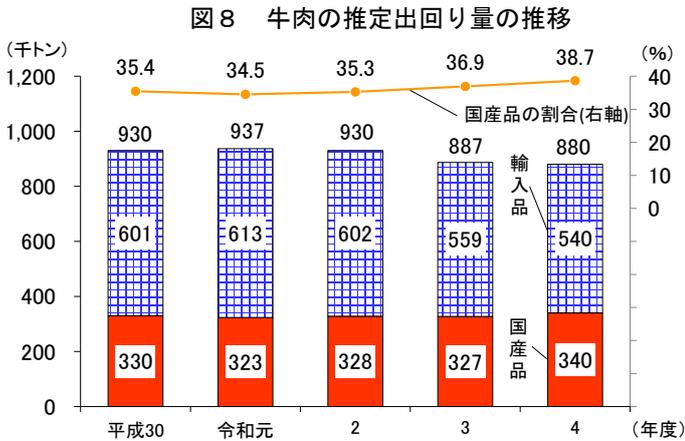
4年度の推定出回り量は前年度比0.7%減、家計消費は同7.4%減

推定出回り量

牛肉の推定出回り量は、近年の好景気などを背景に外食を中心に好調に推移してきたが、令和2年度以降、COVID-19の影響でインバウンド需要や外食需要が大きく減退しており、4年度も、88万428トン（前年度比0.7%減）と前年度をわずかに下回った（図8）。

出回り量の内訳を見ると、国産品は、34万396トン（同4.0%増）と前年度をやや上回ったものの、輸入品は、54万32トン（同3.5%減）と前年度をやや下回った。

なお、合計に占める国産品の割合は38.7%（同1.8ポイント増）と3年連続で前年度を上回った。

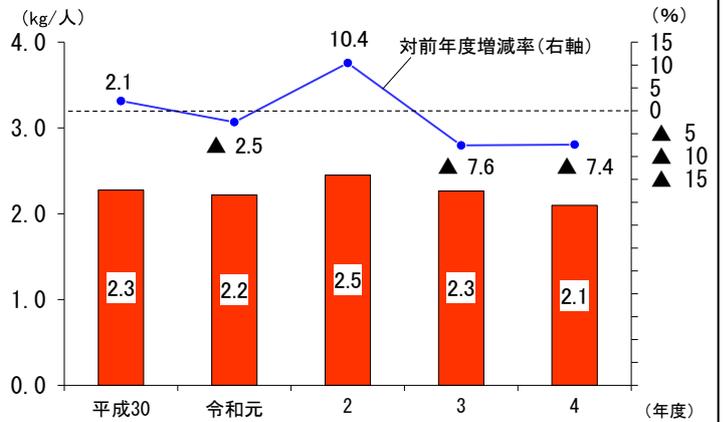


資料：農畜産業振興機構推計
注：部分肉ベース。

家計消費

牛肉消費の約3割を占める家計消費について、令和4年度は、物価高騰による消費者の生活防衛意識の高まりにより、年間1人当たり2.1キログラム（前年度比7.4%減）と、前年度をかなりの程度下回った（図9）。

図9 牛肉の家計消費量（全国1人当たり）の推移



資料：総務省「家計調査報告」

◆在庫

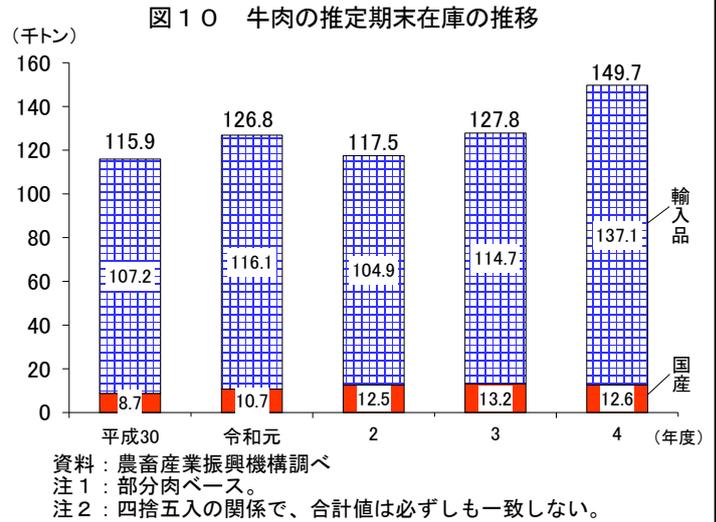
4年度の推定期末在庫、前年度比17.1%増

牛肉の推定期末在庫は、平成30年度は需要を上回る輸入があり、令和元年度はCOVID-19の影響による外食需要やインバウンド需要の減退などがあり、2年連続で前年度を上回った（図10）。

2年度は輸入量の減少などにより、前年度を下回った

ものの、4年度は、3年度同様にCOVID-19の影響による需要の減退などにより、全体で14万9724トン（前年度比17.1%増）と前年度を大幅に上回った。このうち、輸入品は13万7128トン（同19.6%増）と前年度を大幅に上回った一方、国産品は1万

2596トン(同4.4%減)と前年度をやや下回った。



◆ 枝肉卸売価格

4年度の牛枝肉卸売価格、和牛、交雑種、乳用種のすべてで下落

和牛

和牛（東京・去勢A-5、A-3）の枝肉卸売価格は、4年度は、COVID-19の感染拡大や物価の上昇による消費者の生活防衛意識の高まりなどの影響もあり、前年を下回って推移した。

この結果、年度全体としては、A-5が1キログラム当たり2594円（前年度比2.7%安）とわずかに、A-3が同2091円（同3.7%安）とやや、いずれも前年度を下回った（図11）。

交雑種

交雑種（東京・去勢B-3）の枝肉卸売価格は、近年、適度な脂肪交雑などが消費者に広く受け入れられるなど引き合いが高まっており、堅調に推移している。

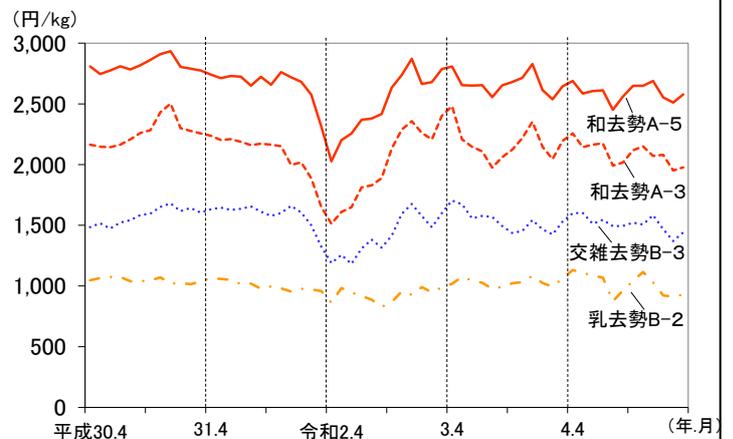
しかしながら、令和4年度は、取引頭数の増加などにより、年度全体としては、1キログラム当たり1511円（前年度比1.6%安）と前年度をわずかに下回った。

乳用種

乳用種（東京・去勢B-2）の枝肉卸売価格は、近年、国産牛の中でも比較的安価で赤身が多い牛肉への底堅い需要がある一方、生産量が減少傾向となっていることから堅調に推移している。

しかしながら、令和4年度は、第2四半期以降、前年度を下回る月がみられ、年度全体としては、1キログラム当たり1015円（前年度比1.4%安）と前年度をわずかに下回った。

図11 牛肉の卸売価格（東京・品種・規格別）の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：消費税を含む。

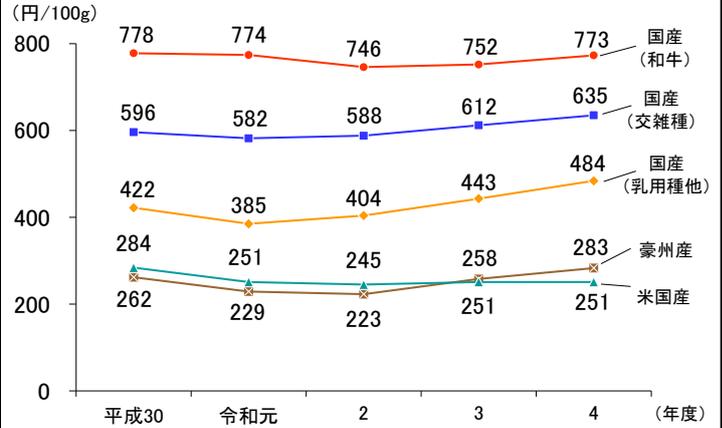
◆小売価格

4年度の小売価格、和牛、交雑種、乳用種のすべてで上昇

牛肉の小売価格は、品種や部位によって動きは異なるものの、おおむね横ばいで推移している。令和4年度は、物価高騰などを背景に、国産品、豪州産で価格が上昇した（図12）。

4年度の小売価格（ばら）は、和牛は1キログラム当たり773円（前年度比2.8%高）、国産牛（交雑種）は同635円（同3.8%高）、国産牛（乳用種他）は同484円（同9.3%高）、米国産は同251円（前年度比同）、豪州産は同283円（同9.7%高）となった。

図12 牛肉の小売価格（ばら）の推移



資料：農畜産業振興機構調べ
注：消費税を含む。

◆肉用子牛

4年度の肉用子牛価格、黒毛和種は前年度比13.8%安

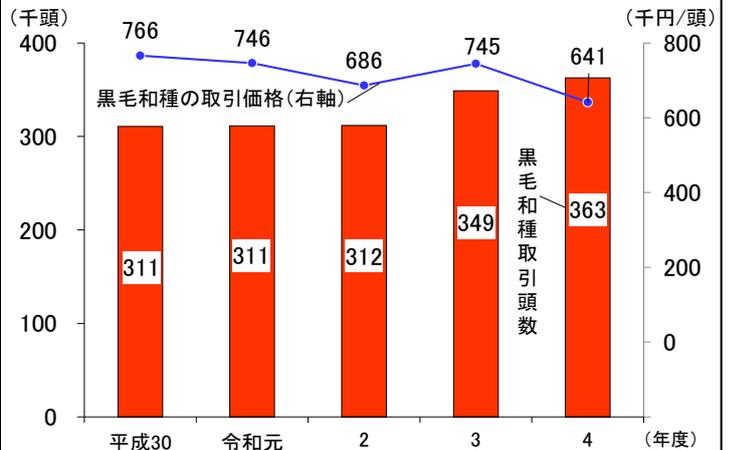
黒毛和種

家畜市場における黒毛和種の子牛取引頭数は、減少傾向にあった繁殖雌牛が生産基盤強化対策の実施などにより増加傾向にあり、近年は安定して推移している。令和4年度は、36万2653頭（前年度比3.9%増）と前年度をやや上回った（図13）。

黒毛和種の子牛取引価格は、平成28年度をピークに低下する中、2年2月以降、COVID-19の影響による枝肉価格の低下に伴いさらに低下した。その後、枝肉価格の上昇などにより回復したものの、4年5月に急落し、一時回復傾向が見られたものの、下落傾向が継続している。

この結果、4年度は、1頭当たり64万1千円（同13.8%安）と前年度をかなり大きく下回った。

図13 黒毛和種の取引頭数と市場取引価格の推移



資料：農畜産業振興機構調べ
注1：消費税を含む。
注2：市場取引価格は、各月の平均価格の単純平均である。

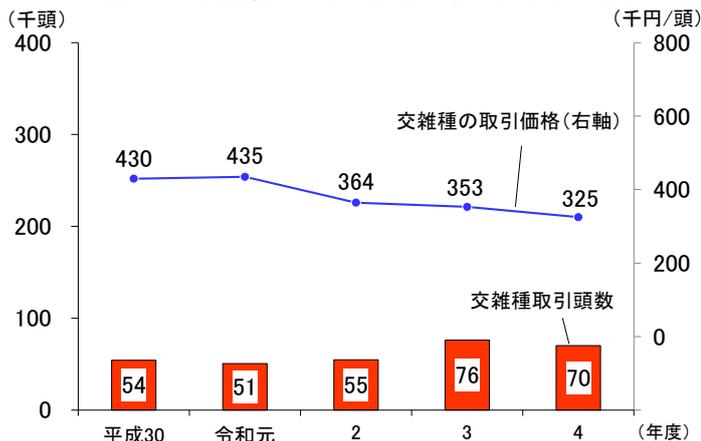
交雑種

家畜市場における交雑種の子牛取引頭数は、乳用牛への受精卵移植技術の活用などによる和子牛の生産拡大や乳用後継牛を確保する動きから、令和元年度までは前年度を下回って推移した。しかしながら、乳用牛の頭数が回復傾向の中で、酪農家における乳用牛への

黒毛和種交配率が上昇したことにより2年度、3年度と増加となったものの、4年度は再び減少に転じ、7万201頭（前年度比7.8%減）と前年度をかなりの程度下回った（図14）。

交雑種の子牛取引価格は、4年度は、1頭当たり32万5千円（同7.9%安）と前年度をかなりの程度下回った。

図14 交雑種の取引頭数と市場取引価格の推移



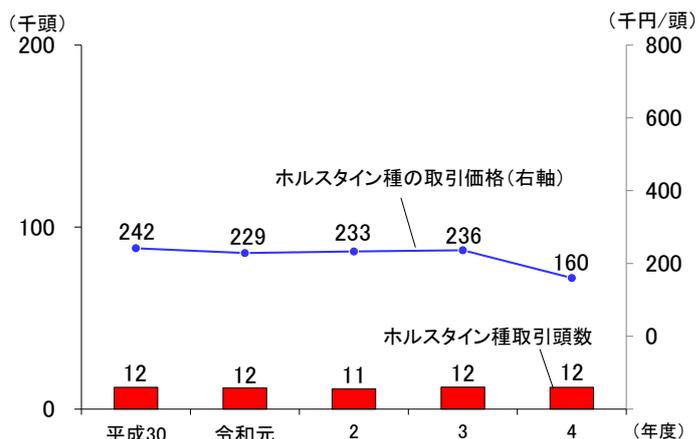
資料：農畜産業振興機構調べ
 注1：消費税を含む。
 注2：市場取引価格は、各月の平均価格の単純平均である。

ホルスタイン種

家畜市場におけるホルスタイン種の子牛取引頭数は、近年、おおむね1万2000頭で推移している。令和4年度は、乳用牛への和牛受精卵移植技術の活用や黒毛和種交配率の上昇もあり、1万1932頭（前年度比1.2%減）と前年度をわずかに下回った（図15）。

ホルスタイン種の子牛取引価格は、近年、取引頭数の減少などを背景に、堅調に推移してきたものの、4年度は、8月に急落するなど低調に推移し、1頭当たり16万円（同32.2%安）と前年度を大幅に下回った。

図15 ホルスタイン種の取引頭数と市場取引価格の推移



資料：農畜産業振興機構調べ
 注1：消費税を含む。
 注2：市場取引価格は、各月の平均価格の単純平均である。